

『日本大辞書』における用例収集法の研究 序説

—— 中古文学における「あさまし」を例に ——

河瀬真弥

一 はじめに

本稿は山田美妙による国語辞書である『日本大辞書』(一八九二〜一八九三年刊)における用例収集法について論じるものである。具体的には、「あさまし」条における中古文学の用例収集を考察し、今後の『日本大辞書』における、中古文学周辺の用例収集法の研究に先鞭をつけるものである。

現在、『日本大辞書』の記述を分析する必要性が高まっているのではないかと、稿者は考えている。それは、『日本大辞書』を近代語研究に積極的に活用しようという動きが近年しばしば見られることと関係する。『日本大辞書』が近代語研究に生かせるという見解を示すものには、今野真一(二〇一四)、木村義之(二〇一五)、湯浅茂雄(二〇二〇)、湯浅茂雄(二〇二一)、湯浅茂雄(二〇二二)などがある。いくつかの研究を以下に見てみよう。

まず、木村義之(二〇一五)の論で注目されるのは、『日本大辞書』の見出し語の中には、『日本国語大辞典』第二版が見出しとしていない語(「あめりきや」「いいさあ」など)があるという指摘である(107〜110頁)。また、『日本大辞書』の見出

しが『日本国語大辞典』第二版の初出例を遡る例(「ええる」、『日本国語大辞典』第二版の見出しは「エール」)があることも指摘している(110〜111頁)。そして木村義之(二〇一五、113〜114頁)は

『日本大辞書』は単独で辞書としての評価は低いのだが、『言海』の補注版のような位置づけで観察すると、多くの新たな発見があり、両書を比べることで『日本大辞書』にはもう少しプラスの評価を与えてよいように思われるのである。

と述べている。

湯浅茂雄(二〇二一、左開58頁)では、『日本大辞書』の収録語数を調査している。その上で、湯浅茂雄(二〇二一)は『言海』に無く『日本大辞書』には存する見出し語について、「①活用語の場合、その文語形に対して口語形を増補する」「②原形に対する音訛形を増補する」「③派生関係にある語を増補する」「④上に関連するが、「〜方」「〜変わり」「〜気味」「〜切り」等の接辞的要素が付く言語単位に関して、『日本大辞書』

は積極的に立項する方針をとる」⑤複合語を増補する」⑥『言海』が「項目の意味区分で扱うものを、項目を新たに立項する」⑦古語の増補に関して、特に枕詞の増補」⑧本草語の増補」⑨●(言専用)を中心とするオノマトペの増補」⑩▲(方言・俚語)及び上記オノマトペ以外●(言専用)の増補」(左開59〜60頁)を指摘し、「⑪漢語・外来語の収録状況は両辞書に大きな差はない」(左開60頁)とする。そして、『言海』と『日本大辞書』の総見出し語数の差分が、ほぼ『日本大辞書』が『言海』に対して増補した見出し語語彙にあたる」(湯浅茂雄二〇二二、左開60頁)と、『日本大辞書』と『言海』の見出し語の特徴を比較している。さらに、以下のように述べる。

このうち①②や⑨⑩に関わるが、山田美妙が辞書中で見出し語の文体を区分する記号である●(言専用)や▲(方言・俚語)を付される話し言葉・俗語・方言や、③④⑤などの派生形や複合語を積極的に立項したことは、明治時代語の言語資料としての活用が望まれるのである。

(湯浅茂雄「二〇二二」、左開60頁) ⑬

湯浅茂雄(二〇二二、左開85頁)は、『日本大辞書』には、『言海』に収められなかった多くの方言語彙が収められている点で、我々にとって、明治時代語の貴重な言語資料となるものである」と、その価値があることを述べている^⑭。

以上のように、『日本大辞書』を近代語の研究に活用しようという動き、特に『言海』を補うものとして『日本大辞書』を活用しようとする動きが近年見られる。しかし、『日本大辞書』

そのものがどのような態度で作られたものであるか、ということを知らずに『日本大辞書』を国語史の資料として用いることには、危うさがあるのではないか。大槻信(二〇一九「初出二〇〇五」、45頁)は資料の利用に関して次のような注意を促す。

われわれが資料に臨む場合、「利用できるから利用する」となってしまうがちである。だが、利用に先立ち、その資料がどのような性格のものか、その資料がある研究目的に利用できるかどうか、また、資料全体の中でその利用可能な部分はいったいどのような位置に立つものか、といった問いかけを欠いては、むしろ逆に資料に使えることになろう。

『日本大辞書』を国語史の資料として利用する場合にも、同じことが言えるだろう。つまり、近代語の研究者が『日本大辞書』に「使われることにな」らないためにも、『日本大辞書』がどのように作られた辞書であるか、山田美妙の国語研究のやり方はどのようなであったかという基礎的な研究が必要であると稿者は考えている^⑮。

また、『日本大辞書』に対する評価には厳しい見方をするものがあるが、このような見方にも国語辞書史、国語学史の客観的な記述にあたっては問題があると考えられる。近代辞書研究の先駆者である山田忠雄は『日本大辞書』について、「要するに、この本は、今日の言葉で言えば、言海のイミテーションである」(山田忠雄「二九八」、618頁、空格原文ママ)、「品位

の点において欠けるところが有って、「究極に於て失敗作」(以上山田忠雄「二九八一」、621頁)などのように厳しい評価を下している^(五)。前田富祺も『日本語学研究事典』(二〇〇七)の「日本大辞書」項目で、「短期間に編集したことによる欠点も多い」(特に後半の部分の記述は粗雑である)「でき上がったものは歴史的意義を認め得るに過ぎない」(102頁)と述べている。しかし、このような『日本大辞書』に対する先入観が強すぎると、『日本大辞書』の特徴が、歪められた形でしか捉えられないのではないだろうか。新たな辞書史・国語学史の記述のために『日本大辞書』に対する先入観を排して、『日本大辞書』を捉え直さなければならない。なお、既に言及した今野真二(二〇一四)、木村義之(二〇一五)、湯浅茂雄(二〇二〇)、湯浅茂雄(二〇二二)、湯浅茂雄(二〇二二)の他にも、『日本語学大辞典』(二〇一八)の「山田美妙」項目(木村義之執筆)が山田美妙について「日本語研究者としての側面も見直されつつある」(970頁)とするように、近年はこの先入観も薄らいでいるところである^(六)。本稿もこの流れを一層進めようとするものである。

本稿は、『日本大辞書』の記述がどのように成り立っているのかということ明らかにするための試みの一つである。本稿では「あさまし」の用例収集を取り上げる。「あさまし」を取り上げる理由は、山田美妙の用例収集の実態が窺える箇所を有するからである。「あさまし」のみの分析で山田美妙の用例収集の実態が全て分かるということはない。しかし、今後このような形で『日本大辞書』を分析していくことが必要ではないか、という提案として、本稿を位置づけたい。

二 「あさまし」の用例収集

二一 『日本大辞書』の「あさまし」条

以下に『日本大辞書』の「あさまし」条の本文を挙げる。各用例に四角囲いのローマ数字及び丸数字を付している。桐壺の例はすべてⅡとして、下位分類に丸数字を用いた。

○あさまし (第三上) 形。(淺まし) (一) アサハカデア
ル。Ⅱ タノミガヒノナイ。Ⅰ 萬葉集「ワレヲタノメ
テあさましモノヲ」。(二) オドロクバカリナ。Ⅱ 思ヒ
ノ外ニハナハダシイ。Ⅱ キモノツブレサウデア。Ⅱ
源氏、桐壺ノウチニケ所、Ⅱ Ⅰ「カカル人モ世ニ
イデオハスルモノナリケリトあさましきマデ目ヲ驚カ
シタマフ」。Ⅱ Ⅰ同「アゲオトリヤト疑ハシクオボ
サレルヲ、あさましウツクシゲサ添ヒタマヘリ」。
Ⅲ Ⅰ同夕顔、「メノトナドヤウノ思フベキ人ハあさま
しウマホニ」。(三) 興ノサメタ。Ⅱ イヤミナ。Ⅱ タノ
ミガタク思ハレル。Ⅱ Ⅲ 源氏、桐壺「カクテモ月日
ハ經ニケリトあさましウオボシメサル」。Ⅳ Ⅰ同末摘
花「あさましノクツキヤ」。Ⅴ 金葉集、「あさまし
ヤコノシタカゲノ岩清水、イクソノノカゲヲ見ツラ
シ」。
〔『日本大辞書』第1巻・28頁〕

本稿で注目するのは、『源氏物語』の用例である。そのため、
用例のⅡ、Ⅱ①、Ⅱ②、Ⅱ③、Ⅲ、Ⅳに注意してもらいたい。

二二二 先行辞書が挙げる用例

山田美妙が用例を収集するにあたって、過去の辞書を手がかりにしている可能性があるため、『日本大辞書』以前の辞書の記述を見てみよう。『日本大辞書』以前の、用例を載せる主な辞書の記述は以下の通りである（『源氏物語』の用例に網掛けを付した。また、『日本大辞書』に付した用例番号と対応する番号を付した）。『日本大辞書』が挙げる用例が先行辞書に無い、ということ述べる必要性から、読者がその主張を確認できるよう、引用箇所が長大になっている箇所がある。

・『倭訓栞』前編（谷川士清著、一七七七〜一八三〇年刊）には「あさまし」条無し。

・『倭訓栞』中編（谷川士清著、一八六二年刊）（第35冊「前編から通算」・17コマ目）

あさまし 浅き意也。まし助語。又まし反、み也。おそ

ましてふ語の轉といへるはあらず。家隆卿

しかりとて直き心も世にたえずまじる蓬のあさましの世や

諺に、曲らねば世に立ずといへり。世説に王光祿如「屏風屈曲」從「俗能蔽風露」と見えたり○略してあさまともいへり

・『倭訓栞』後編（谷川士清著、一八八七年刊）には「あさまし」条無し。

・『増補雅言集覽』（石川雅望原著、中島廣足増補、一八八七年刊）（第45冊・21〜23コマ目。適宜空格を設けた）

あさまし 空穂「藏開」下ノ四十八「さばかりかしき宮殿ばらをならひ給へればいかにあさましき所とおもほすらん（同「國讓」）下ノ十九」○「おと」詞「年頃はあさましくおほやけにもすてられ奉りたるやうにて

（同「嵯峨院」）「百四」○「兒君ノコトヲ」宮はいと大になりにけりはじめはいとあさましや月ごろ御らんじならひたらんを（六帖）「恨てもしるしなればしなるあさまの山のあさましや君（後）「戀」長谷雄」一ふしてぬる夢路にだにもあはぬ身は猶あさましきうつとぞ思ふ（古）「誹諧なかき」雲はれぬ淺間の山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめⅤ「戀四、よみ人しらす」あさましやこの下かげのいはし水いくその人のかげをみつらん（同）「同同」「さをしかのつめだにひぢぬ山川のあさましきまでとはぬ君哉（順集）「廿五」一あてもこひふしてもこふるかひもなく影あさましく見えぬ山の井（兼盛集）「廿一」あさましく有明の月と出つれどひたかく人にみえもするかな（齋宮女御集）「九」あさましく舟ながしたるあまよりも我袖の浦のしもゝかわかず（兼盛集）「十三」さゝれ石の上もかわかぬ澤水のあさましくのみ見ゆる戀かな（同）「十六」神なびの山のさ

は水我（水）なれやあさましくのみ見えし（わたりぬる）や數かぎりなきちり（拾玉）

「四、春日法樂百首法文」「あさましや數かぎりなきちりの山をいくらくこえこし聖とか見る（順徳院御記）」「承久二年」下説源氏歌は劣也狹衣「云々」此條心憂淺猿鋪事也更非（三）同日論「云々」（宇治拾）「三ノ廿一」鳥べ野へゐていぬとて「云々」道などにて落などすべき事にもあらぬにいかなる事にかと心得ずあさましすべき方もなくて「云々」此つまど口にもとのやうにてうちふしたりいとあさましくもおそろしくて「云々」ひつきより出て又つまど口にふしたりいとあさましきわざかなとて又かきいれんとて（同）「三ノ廿五」なべてのひさごにも似ず大に「云々」きり明て見れば物ひとは入たり何にかあるらんとどうつして見れば白米の入たるなり思ひかけずあさましと思ひて大なる物にみなをうつしたるにおなじやうに入てあればたゞごとにあらざりけり「云々」（同）「四」此むくいには物よくあらせ奉りてよき男などあはせ奉るべきなりといふとなん見つるとかたるにあさましくなりて此やどりたる女のいふやう（同）「一ノ四」あしくよくまふもありあさましと見るほどに（同）「八ノ三」○「下野武正大風大雨に簑にて法性寺に集りたる所に」殿南おもてへ出てみすより御覽ずるにあさましくおぼしめして御馬をなんたびけり（枕）「五ノ十六」あさましき物、さし櫛みがくほどに物にさへて折たる、車の打かへされたるさるおほかなる物は所せくひさしくなやあらんとこそ思ひしが只夢の心ちしてあさましうあやなし、人のためにもはづかしきことつゝみもなく兒もおとなもいひたる、必きなんと思

ふ人を夜一よまちあかして曉方に只いさゝか忘れてぬいたるに鳥のいとちかくかうとなくにうちみあげたれば晝になりたるいとあさまし、てうばみにどうとられたる、むげにしらすみずきかぬ事を人のさし向ひてあらがはずべくもなくいひたる、物うちこぼしたるもあさまし、のり弓にわなゝく／＼ひさしうありてはづしたる矢のもてはなれてこと方へ行たる **II①**（源「桐壺」）「六十四」かゝる人も世におはする物也けりとあさましきまで目を驚かし給ふ（宇治拾）「二ノ卅二」我をおひける大學の衆あさましく力ある者にてぞありけるなめり（同）「十一ノ十六」大なる男三人いくほどもへだてずきりふせたるあさましくつかひたる大刀かな（源「夕顔」）「五十一」わか君の上をだにえきかずあさましくゆくへなくて過ゆく（同「帚木」）「四十」こゝちはたわびしくあるまじきことゝもおもへばあさましく人たがへにこそ侍るめれといふもいきのしたなり（同）「四十五」御文をもてきたれば女房あさましきになみだもいできぬ（同「空蟬」）「八」打みじろきよるけはひいとるしあさましく覺えてともかくも思ひわかれず（同）「十二」姉君まちつけていみじくの給ふあさましかりしにとかくまぎらはしても人の思はんことさり所なきに（同）「十二」御せうそこもなしあさましと思ひうるかたもなく（同「夕顔」）「十六」人のけはひいとあさましくやはらかにおほどきて（同「帚木」）「廿」君たちあさましと思ひてそれごとゝてわらひたまふ○宣長云此詞ハヨキコトニモアシキコトニモ云テ俗言ニけしらぬきものつづれた事など云フ心ナリ **補**（千載）「戀四、和

泉式部」「これもみなさぞなむかしのちぎりぞとおもふものからあさましきかな (同)「同實重」「あさましやさのみはいかにしなのなる木曾路のはしのかけわたるらん (万代)「春下國信」「あさましや日かず行ともおもほへで春のこよひに成にける哉 (金葉)「戀下俊賴」「あさましやこはなに事のさまぞとよ戀せよともうまれざりけり (拾玉)「二」「あさましや散行花をゝしむまにしきみもつまずあかもくまれず (著聞)「五ノ八」あさましくふしぎにおぼえて (宇治拾)「十四」唐人玉をうけとりて手の上におきてうちふりて見るまゝにあさましとおもひたるかほけしきにて (同)こはいかにあさましくてとへば「云々」 (著聞)「六ノ廿五」あさましくうれしげにおもひたり

・『語彙』(木村正辞、横山由清総裁、一八七二〜一八八四年刊)
(巻2・13才〜13ウ)

あさましき 「シクシシキ」「淺ましなり。又淺慮なる状をもいふ。**I**万「十四」われをたのめて安佐麻之物能乎」

あさましき 「シクシシキ」「物の分に過て思ひの外なるをみて驚くなり。**キ**ヨウノサメタ又**ア**キレタ或ハ**ア**ヨウサンデアル又**タイ**サウデアルの意にもいへり**拾遺**「戀四」さを鹿のつめだにひたぬ山川のあさましきまでぬるゝ袖かな**源**「帚木」御ふみをもて来たれば女房あさ

ましきになみだもいで来ぬ**III**又「夕見」めのとなどやうの思ふべき人はあさましうまほにみなすものを」

・『俚言集覽』稿本 (太田全斎著、成立年不詳) (影印本第1巻86頁。「太平記三十」にカッコ閉じが無いのは原文マ)^(丸)

アサマシ 「淺猿」「二字とも仮名書也」○甘身^{アサマシ(金部三十一)} ○糞を訓り「愚按」マシノ反ミ也。アサミ也。○雅語譯解あさまし「キヨウノサメタ事ヂヤ」アキレタコトヂヤ○石川雅望説あんまりな事」

〈引用者注・以下、上側の余白の記述〉本居氏曰、アサシはよき事にもあしき事にもいひ、俗にけしからぬきものつづれたことなど云意也

・『ことばのはやし』(物集高見著、一八八八年刊) (36頁)

あさまし サ。フ。淺。ものごとのあさはかななるをいふ。**I**万「十四」(われをたのめてあさましもの)を)

あさまし サ。フ。ものごとのおもひのほかにておどろきぬべくあるをいふ。拾遺(さをしかのつめだにひたぬ山川のあさましき迄ぬるる袖かな)**源**「帚木」(御ふみをもてきたれば女房あさまし

・『言海』（大槻文彦著、一八八九〜一八九一年刊）（第1冊・13頁）

あさーま・し・シキ・シケレ・シク・シク（形、二）（一）（驚クホ
ドニ甚シ。思ヒノ外ニ肝潰ル。〔善キニモ、悪シキニモ〕
驚歎（二） 興醒ム。呆ル。（多く、悪シキニ）

なお、「あさまし」の語については、明治期国語辞書大系（大空社）における、『日本大辞書』刊行以前のもの全てを確認している。本稿に引用が無いものは、当該辞書において「あさまし」の用例掲載、および「あさまし」条（語形に小異があるものも含む）の立条が確認できなかったものである。

二二三 考察

『日本大辞書』の「あさまし」における『源氏物語』桐壺の用例のうち、**II①**は『増補雅言集覧』に、**III**は『語彙』に見られる。しかし、**II②**と**II③**については、ここで確認した先行辞書に無い。そのため、山田美妙が自身で『源氏物語』の桐壺を読んで用例を探した可能性がある。**IV**の末摘花の用例についても、先行辞書に無い用例であるため、山田美妙自身が末摘花を読んで探した用例である可能性がある。

山田美妙が自身で『源氏物語』のテキストを読んで、用例を

探した可能性をさらに示唆するものとして、用例を計量していることが挙げられる。『日本大辞書』は「源氏、桐壺ノウチニ二ケ所」と、用例数を計量している。これは自身で桐壺を読んで探し、計量したからこそなせる記述である。なお、桐壺における用例数について、『日本大辞書』は「源氏、桐壺ノウチニ二ケ所」**II①**と**II②**あるものに加えて、別義としてもう1例の用例を挙げている**II③**。この3例は当時流布していた『源氏物語』のテキストである『湖月抄』の桐壺に見られる「あさまし」の全例であり¹¹¹、山田美妙は『源氏物語』の桐壺から漏れなく「あさまし」の例を拾い上げること成功している¹¹²。

計量については、何らかの注釈書によっている可能性もあるので、主要な近世の注釈書において、桐壺巻の「あさまし」が計量されていないかも確認しておこう¹¹³。『首書源氏物語』、『湖月抄』（北村季吟）、『源註拾遺』（契沖）、『源氏物語新釈』（賀茂真淵）、『源氏物語玉の小櫛』（本居宣長）、『源氏物語評釈』（萩原広道）の「あさまし」の箇所¹¹⁴の注において、「あさまし」の計量についての記述が見られない¹¹⁵。そのため、『日本大辞書』の「あさまし」における計量は、山田美妙が行ったものである可能性を考えて良いのではないだろうか¹¹⁶。

また、『増補雅言集覧』には見られた**II①**の用例についても、山田美妙が独自に調査を行った可能性が指摘できる。『増補雅言集覧』では「源〔桐壺〕〔六十四〕かゝる人も世におはする物也けり」とあさましきまで目を驚かし給ふ」となっていたが、『日本大辞書』では「カカル人モ世ニイデオハスルモノナリケリトあさましきマデ目ヲ驚カシタマフ」と本文に違い

がある（「イデ」の有無）。『増補雅言集覧』では「凡例」に、「張数は源語は湖月抄によりつ」（第1冊・8コマ目）とあるため、『増補雅言集覧』の『源氏物語』本文は北村季吟の注釈である『湖月抄』であると考えられる。ここでは『増補雅言集覧』が引用を誤っており、『湖月抄』には「世にいでおはするものなりけり」（桐壺・7コマ目）と「いで」を有する形の本文となっている^{（九五）}。仮に『日本大辞書』において『増補雅言集覧』を参考文献として利用していたとしても、そこからの孫引きではなく本文を山田美妙が自ら確認していたということは揺るがない。そして、『増補雅言集覧』は丁数も誤っており、『増補雅言集覧』では「六十四」とあるが、当該用例の所在は『湖月抄』で6丁表であるので、『増補雅言集覧』に頼っているのは、当該用例にたどり着けない。つまり、『日本大辞書』の「あさまし」条は、先行辞書として用例数が最大規模である『増補雅言集覧』を利用してすらいけない可能性が考えられる^{（九六）}。

三 まとめと展望

本稿では『日本大辞書』の「あさまし」について、編者である山田美妙が自ら用例採集を行い、計量を行っていた可能性が高いこと、『増補雅言集覧』を利用していない可能性があり、仮に『増補雅言集覧』を利用していても、そこからの孫引きではなく『源氏物語』のテキスト（『湖月抄』）に立ち返って本文を確認していたことを指摘した。

わずか一条のみの考察により『日本大辞書』全体を論じることは危うい。しかし、『日本大辞書』は「あさまし」において、

桐壺や末摘花から自力で用例を探しており、かつ桐壺から「あさまし」の用例を漏れなく挙げるという入念な作業がなされている可能性がある点は注意されるべきではないかと思われる^{（九七）}。このように『日本大辞書』に入念な調査の形跡が認められるということは、近代語の資料として『日本大辞書』を利用する上での資料の信頼度（近代語に関わる内容に信憑性があるか否か）にも関わってくるのではないだろうか^{（九八）}。資料の信頼度については、以下に引用する月本雅幸（一九九六、56、57頁）が述べるような、訓点資料の内容についての言及が参考になる^{（九九）}。

第四に、古い訓点の内容を絶対視することは危険である。訓点の内容は学僧たちの研究の結果であるから、訓点も加筆者の学力に対応したそれぞれの段階のものが存在するはずである。実際、一方では極めて整然とした高水準の訓点もあると同時に、他方では誤り（誤点）を多く含む信頼性の低いものも存在する。後者のようなものを珍しい訓点と理解したのでは大きな過ちを犯すことになる。

近代国語辞書においても、書かれている内容の信憑性を考慮すべきであろう。近代国語辞書の国語資料としての信頼度は、本稿で行ったような、内容の分析によって判定できることでありと考えられる。

なお、一条のみの考察である点は確かに問題である^{（一〇〇）}。しかし、今後、我々研究者が『日本大辞書』に接していく上では、『日本大辞書』の他の箇所にも「あさまし」条のように手の込

んだ箇所が存在する可能性を念頭におくべきであろう。そして、『日本大辞書』がどのように作られているかを明らかにしていくには、本稿で行ったように一条一条を読解していく他に方法は無いように思われる。その点、本稿は『日本大辞書』の編纂態度を理解するための方法を提示できてもいるだろう。

今後も『日本大辞書』の記述を分析することによって、『日本大辞書』の成果がどのように編み出されたのかを考察し続ける必要があると考える。当然ながら、入念な作業が窺えるところだけではなく、不出来である点も分析しなければならぬ。例えば、今回取り上げた中に典を誤る例がある^{〔V〕}。このような出典の誤っている例からも、山田美妙が用例をどのように取り扱っていたのか、用例に対する考えがどのようなであったかを知る手がかりが得られるだろう^{〔三十四〕}。以上のように、『日本大辞書』の用例（あるいはその他の部分）に関して考察を続けることは、『日本大辞書』を語彙史の資料として活用するために欠かせない作業である。

〔注〕

- (一) 語彙史研究における『日本大辞書』の活用の動きが最近活発である一方で、アクセント史の資料としては、例えば稲垣正幸（一九五二）に見られるように、早くから評価されていた。
- (二) 『日本大辞書』の「符号ノ解」にて『日本大辞書』で使われる各種符号の説明があり、「○」が「文専用」、「●」が「言専用」である。

(三) 湯浅茂雄（二〇二二、左開85頁）は『日本大辞書』が、どのようにしてこれらの方言語彙を立項することが出来たのかの探求

は、明治20年代の方言研究史を紐解くことにもつながると考える」と、国語学史研究での展望も述べている。

(四) 注（三）に引用した湯浅茂雄（二〇二二）の考えも今後参考にしていくべきであろう。

(五) ただし、『日本大辞書』が「◎」を使って補注を示したことに ついては、「従来の辞書には殆ど見えなかったもので、多分に建設的である」（山田忠雄（一九八二）、619頁）と述べている。また、山田忠雄（一九五九）においては『日本大辞書』の記述を「客観的」と好意的に評している箇所がある（14頁、15頁）。このように、山田忠雄によって評価される点も存する。

(六) 今野真一（二〇一四、181-182頁）が

辞書がそれぞれ編集方針をもつことからすれば、複数の辞書を対照することによって、その辞書が編まれた時期の言語について得られる「情報」の幅は広がり、深さは増すと期待される。『日本大辞書』を「言海」のイミテーションとして「切り捨てる」必要はないと考える。

としているのも、この流れ、つまり『日本大辞書』再評価の流れに属するものであろう。

(七) ^{〔V〕}の用例は、『金葉和歌集』ではなく、『拾遺和歌集』が正しい（二十一代集本を底本とする「日本語歴史コーパス」で検索し、二十一代集本の『拾遺和歌集』下に見られることを確認した）。また、行頭の「○」については注（二）を参照のこと。

(八) 一七五九生、一八二九没。生没年は『国史大辞典』による。

(九) 『雅語訳解』も確認したが、「あさまし」[キョウノサメタ事チヤ。

アキレタコトヂヤ」(63コマ目)とあるのみである。また、「石川雅望」は『雅言集覧』の編者である。

(十) 鈴木健一(二〇一四)は「明治時代から戦前までは、近世の注釈がかなり有用なものとして流通していた」(172頁)と述べ、一例に『湖月抄』を挙げている。山田美妙が読んだ『源氏物語』のテキストとして、まずは『湖月抄』を考えなければならぬ。

(十一) 参考のために、「日本語歴史コーパス」で桐壺を対象に短単位検索で語彙素「浅ましい」を検索して用例数を確認した。

(十二) 確認した注釈書は、島内裕子(二〇二二)『源氏物語』の研究史(2)で取り上げられるものに加え、『源氏物語』を対象とした。なお、対象とした注釈書のうち、『紫家七論』は『源氏物語』の語釈を行うものではない。

(十三) 『首書源氏物語』の桐壺巻においては、「あさまし」のいずれの箇所にも注が付されていない(「あさまし」の所在は「桐壺」の33コマ目、44コマ目、55コマ目)。

『湖月抄』の桐壺巻の「あさまし」の初出の箇所の注釈に「あさましきまで／抄つよくおもひ入てこと／しきころ敷」(6オ(7コマ目))とするように計量についての記述はなく、他の「あさまし」の箇所についても計量に関する記述は確認できなかった。他に「あさまし」が登場するのは17オ(18コマ目)と27ウ(29コマ目)。

『源註拾遺』には、「あさまし」についての言及を確認できなかった。

『源氏物語新釈』(賀茂真淵)の桐壺巻においては、「あさまし」に注が付されていない(「あさまし」の注釈があることが期待されるのは、『賀茂真淵全集』第13巻で41頁、48頁、56頁)。

『源氏物語玉の小櫛』の桐壺巻においては、「あさまし」の初出の箇所において「あさましきまで同 此詞は、よき事にもあしき事にもいひて、俗言に、けしからぬきものつづれたことなどいふ意也」(209コマ目)のように計量についての言及はなく、初出ではない箇所において「あさまし」の注釈は確認できなかった(「あさまし」の注釈があることが期待されるのは216〜217コマ目、225コマ目)。

『源氏物語評釈』の桐壺巻においては、「あさまし」の箇所に頭注は無く、本文に併記されている語釈にも計量的記述は確認できなかった(「あさまし」の用例があるのは本文で109コマ目、120コマ目、131コマ目)。

(十四) なお、計量については『源氏物語』のこれ以外の注釈書が計量しており、山田美妙がそれに則ったという可能性も考えられる。その場合、計量の精密さを山田美妙に帰することは出来ないものの、注釈書によって『源氏物語』の本文から用例を探す、という作業が行われていたことになる。しかも、主要ではない『源氏物語』の注釈書を利用しているということになり、その場合も山田美妙の編纂に対する姿勢が窺えて興味深いと言えよう。

また、索引の利用の有無については今回は未検討であるが、『源氏物語色葉分』のように、本文を記さずに巻と丁数のみを記すような索引であれば、そこからの孫引きはあり得ず、したがって山田美妙による本文の確認があったと考えなければならぬ(ちなみに、『源氏物語色葉分』には「あ」部が無い)。

(十五) 『首書源氏物語』(一六四〇年跋)においても、「世にいでおはするものなりけり」(桐壺巻・33コマ目)という本文になっている。

(十六) ここでの「利用」の指す範囲として、例えば、参考程度に山田美妙が『増補雅言集覧』を見る、その上で『源氏物語』に用例があることを知る、といった程度の利用法が無かったとは言えない。

(十七) なぜ「あさまし」の語にこれほど労力を注いだのか、という点については結論を得ていない。山田美妙が『日本大辞書』を編む上でどのような語に力を注いだのか、力を注いだとみられる語の共通点は何か、といった問題にも今後取り組んでいかねばならない。

(十八) 本稿は近代語を扱うものではないので、「あさまし」の例がただちに近代語資料としての評価に影響するとは飛躍がある。ただ、『日本大辞書』を語彙史の資料として扱う上での信頼性にかかわるかもしれない、という程度には、『日本大辞書』に入念な調査の痕跡が認められる箇所があることを留意しても良いのではないだろうか。

なお、今野真二(二〇一四)は語釈に関して、『日本大辞書』の「工夫」(161頁)を読み取るところがあるが、本稿の成果としては、言語研究の根幹たる用例収集についても、入念な調査の形跡を認め得ることを強調したい。

(十九) この部分は、
ただし、訓点資料を仏教学的見地から研究する場合、注意すべきであろうと思われる点がいくつかある。国語学的研究の経験を踏まえて参考のために列挙しておきたい。

(月本雅幸(一九九六)、56頁)

とする内容の一部である。

(二十) 大槻信(二〇一九、45頁)も「全体として理解することがなければ部分も有効に活用できないはずである」と述べる。

(二十一) 本稿では未検討であるので、稿を改めて論じたい。

〔テキスト〕

・引用文の点線、網掛け、四角囲いのローマ数字及び丸数字は私に付したものである。

・合字、変体仮名については現在の表記に改めた。

・文中の区切り点は、私意により句点、読点に分ける場合がある。句読、清濁は私に補ったところがある。

・「あさまし」については明治期国語辞書大系を『日本大辞書』刊行以前のものについて全て確認している。

・論中、「日本語歴史コーパス」の検索結果に言及することがある(二〇二三年三月データ、中納言バージョン27.1)。

『雅語訳解』は早稲田大学図書館蔵、請求記号(ホ02 05614)の本によった(早稲田大学の「古典籍総合データベース」を使用)。

『首書源氏物語』は国立国会図書館蔵、請求記号(85038)の本によった(「国立国会図書館デジタルコレクション」を使用。調査の参考として検索に「次世代デジタルライブラリー」を用いた)。

『言海』の引用は山田俊雄(編)『私版日本辞書言海』(大修館書店、一九七九年)により、調査・検索には「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」(<https://jsoo-roiz.jp/PPDICT/>)を用いた(最終更新日二〇二二年四月三日)。

『源氏物語色葉分』は古典籍索引叢書 宮内庁書陵部蔵『類標』第二

十八卷(梅田径〔監修・解題・解説〕ゆまに書房、二〇一八年)を確認した。

『源氏物語新釈』は久松潜一(監修)、秋山虔、鈴木日出男(編)『賀茂真淵全集』第13卷(第14卷に続く、続群書類従完成会、一九七九年)によった。

『源氏物語玉の小櫛』の引用は国文学研究資料館鶴飼文庫蔵、請求記号(96-7841-9)の本によった(国書データベース)を使用。

調査には、大野晋(編)『本居宣長全集』第4卷(筑摩書房、一九六九年)を使用した。

『源氏物語評釈』は源氏物語古注釈大成(日本図書センター)により調査し、加えて国文学研究資料館初雁文庫蔵本(請求記号〔12482-1-13〕)を確認した(国書データベース)を使用。

『源註拾遺』は久松潜一(監修)『契沖全集』第九卷(岩波書店、一九七四年)によった。

『語彙』は明治期国語辞書大系(大空社、一九九七年)によった。

『湖月抄』は早稲田大学図書館蔵、請求記号(文庫30 A0191)の本を用いた(早稲田大学の「古典籍総合データベース」を使用)。

不明瞭な箇所については、早稲田大学図書館蔵、請求記号(文庫30 A0100)の『湖月抄』を確認した(早稲田大学の「古典籍総合データベース」を使用)。

『ことばのはやし』は明治期国語辞書大系(大空社、一九九七年)によった。

『紫家七論』は平重道、阿部秋生(校注)『近世神道論 前期国学』(日本思想大系、岩波書店、一九七二年)を確認した。

『拾遺和歌集』は「日本語歴史コーパス」(二〇二三年三月データ、中納言バージョン 271)により検索し、紐付けられた二十一代

集本の画像を確認した。

『増補雅言集覧』(石川雅望著、中島廣足増補、一八八七年刊)は国立国会図書館蔵、請求記号(103-229)の本によった(国立国会図書館デジタルコレクション)を使用。臨川書店より一九六五年刊行の『増補雅言集覧』(三冊本の複製、見出しを五十音順にした、木下正俊、久山善正(編)『増補雅言集覧索引』臨川書店、一九六八年)が工具書として利用可能。

『日本大辞書』は明治期国語辞書大系(大空社、一九九八年)により、検索は「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」を用いた。

『倭訓栞』前編・中編は国立公文書館蔵内閣文庫本(263-0007)の本によった(国立公文書館デジタルアーカイブ)を使用。『倭訓栞』後編は『倭訓栞後編』(すみや書房、一九六六年)によった。調査・読解には伴信友(補閲)、井上頼園、小杉樞郎(増補)『増補語林倭訓栞』(皇典研究所、一八九八年)を参考とした。

『俚言集覧』稿本はことわざ研究会(監修)『俚言集覧 自筆稿本版』(クレス出版、一九九二〜一九九三年)によった。調査の際、『増補俚言集覧』を参考とした(国立国会図書館蔵、請求記号〔813-6-R472-M〕の本によった)。「国立国会図書館デジタルコレクション」を使用。

【参考文献】

稲垣正幸(一九五二)「国語アクセント史研究の回顧」『国語学』10。
大槻信(二〇一九〔初出二〇〇五〕)「平安時代の辞書についての覚書」大槻信『平安時代辞書論考——辞書と材料——』吉川弘文館。初出は『国文学』(学燈社)50-5。

木村義之(二〇一五)「山田美妙『日本大辞書』の外来語——国語辞書から見た外来語——」『悠久』143。

今野真二(二〇一四)「『言海』をライバル視した山田美妙『日本大辞書』」今野真二『『言海』を読む ことばの海と明治の日本語』角川選書、KADOKAWA、第五章。

島内裕子(二〇二一)『源氏物語』の研究史(2)「島内裕子『日本文学の研究史』放送大学教育振興会、第6章。

鈴木健一(二〇一四)「近現代の注釈」鈴木健一『古典注釈入門 歴史と技法』岩波現代全書、岩波書店、第II部第3章。

月本雅幸(一九九六)「訓点資料」日本仏教研究会(編)『日本の仏教』5、法蔵館。

山田忠雄(一九五九)「漢和辞典の成立」『国語学』39。

山田忠雄(一九八一)「言海以後」山田忠雄『近代国語辞書の歩み

その模倣と創意と』上、三省堂、第三部第二章。

湯浅茂雄(二〇二〇)『『言海』と『日本大辞書』の語彙』飛田良文、

佐藤武義(編)『近代の語彙1——四民平等の時代——』シリーズ(日本語の語彙)5、朝倉書店。

湯浅茂雄(二〇二一)『『言海』『日本大辞書』の収録語数をめぐって』

『実践国文学』100。

湯浅茂雄(二〇二二)「山田美妙『日本大辞書』の方言語彙」『実践国文学』101。

『国史大辞典』は「JapanKnowledge Lib」版によった。

『日本語学研究事典』(飛田良文〔編集主幹〕、明治書院、二〇〇七年)。

『日本語学大辞典』(日本語学会〔編〕、東京堂出版、二〇一八年)。

『日本国語大辞典』第二版は「JapanKnowledge Lib」版によった。

〔付記〕

・本稿はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMIS2110の助成を受けた研究成果である。

(かわせ しんや・本学大学院文学研究科博士後期課程、

本学大学院教育支援機構奨励研究員)